



釉薬の基本

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 釉薬について

「やきもの」を鑑賞するときのポイントはいくつかあり、重要な要素として、やきものの色がある。やきものを見るときに、まず目に入ってくるものは形、模様というよりもやきものの色である。色の根幹が何かと言えば、「釉薬」ということになる。やきものの色を考えるときに重要な要素はふたつあり、解説シート89で紹介した酸化炎焼成と還元炎焼成である。そして、釉薬であり、その原料の成分や比率で様々な色を表現していくこととなる。本解説シートでは、この釉薬について解説を行う。

2 釉薬とは!?

釉薬とはなにか。平たく言えば、「ガラス」ということになる。日本では、縄文・弥生時代と土器を野焼きで製作してきた。古墳時代に入り、土器の伝統は土師器として残り、朝鮮半島の新技術(窯と轆轤)による須恵器が生まれる。この窯の導入によって、温度を高くすることだけではなく、窯内の酸素量をコントロールすることができるようになった。また、思わぬ発見もあった。木や葉を燃料として焼成を行う際に、灰が器物にかかり、それが高温で溶けてガラスの被膜ができたのである。この時、胎土の中のガラス成分も溶け出して、灰の部分のガラスと結びつき、それが冷えることによって胎土も固くなる。胎土と釉薬のガラス成分がともに結着することで釉薬は剥がれることがない。

この釉薬が誕生したことで液体が漏れることがなくなり、汚れも付きにくいという利点が生まれた。さらには、様々な色や艶も生まれ、「やきもの」を装飾し、美的な効果を得ようとする側面もあった。

東洋では、この灰釉の鉄分量と窯内の酸素量により、青磁、白磁、黒釉などのやきものへ発展させてきた。東洋陶磁史とは胎土と釉薬の改良の歴史でもある。当初、ややもすれば汚くも見える灰釉を陶工たちが時間をかけて「美」への領域まで引き上げたのであ

る。たとえば、重要文化財「青磁茶碗 銘 馬蝗絆」(龍泉窯・南宋時代 東京国立博物館蔵)のようなブルーがかった緑色の砧青磁などがあるし、中国青磁の皇帝と名高い北宋の汝窯青磁や南宋官窯青磁を忘れるわけにはいかない。これらのやきものを見ていくと、形や模様よりも釉薬の色そのものに命を懸けて「美」としての価値を貫徹させた陶工の意志を感じるのである。それで次に陶工たちが発展させてきた釉薬の種類を紹介していこう。

3 青磁

信号機の青を指して「みどり」と言う人がいるように、「あお」といっても様々な青があるし、「藍」の話をすれば、さらに話は大きくなっていく。古来、日本ではこの青について様々な見解が出てくるのだが、ここでは古陶を参考に見ていこう。日本に初めて入ってきた越州窯の青磁を見ていると黄味を帯びた色だし、宋代の福建省同安窯の青磁もやはり朽葉のような黄味をずいぶんと帯びている。秋ほど例に挙げた南宋の砧青磁でも明時代になるとブルーがかかるような緑ではなく、緑の濃い深緑色を成している。

このような青磁のさまざまな発色は、灰の中にあるわずかな1-3%程度の鉄分によるもので、さらに窯内の酸素量の多寡によるものである。窯の中の酸素量の多い状態を酸化炎焼成と呼び、黄味を帯びた青磁色になる。一方、酸素量の少ない状態を還元炎と呼び、青味を帯びた緑色を呈することになる。

さて、この青磁の色を濃くするには鉄分の量を増やしても深い色にはならず、逆に黒色に転じていくだろう。青磁の色をより濃く深くするには、釉薬を何重にも厚くしていく必要がある。板ガラスを思い浮かべてほしい。横の小口を見ると強い青緑色をしているのが分かる。ガラスに含まれる鉄分が厚みを増すことで発色しているのである。原理はこれと同じである。

3 白磁

青磁が釉薬の鉄分量により発色するといったが、白

磁には反対に釉薬の鉄分量をより少なくし、胎土の鉄分も少なくしていき白色にする必要がある。厳密には白い釉薬というよりも透明と言った方が正しい。しかし、この胎土と釉薬の鉄分量を少なくしても0にはできなかった。だから、鉄分がわずかでも含まれていると、窯内が酸化炎焼成になれば、黄味をおびるし、還元炎焼成になれば、灰色や青白色になっていく。宋代の景德鎮窯が得意とした青白磁は胎土が白色で釉薬には1.5%ほどの鉄分があり、還元炎焼成をすることであの発色を得たのだった。だから、白磁を焼くには窯内は酸化にも還元にも傾かない中性炎焼成にする必要があった。

白磁とは胎土・釉薬の鉄分の除去、窯内のコントロールという技術がないとできない。青磁が中国では春秋戦国時代には「原始青磁」として確認できる中で、白磁の安定的な生産は隋時代を待たなければならない。近年、三国志で著名な曹操の墓から白磁が発見されたというが、筆者はいささか懐疑的であり、灰釉陶器の一種としたほうが良いように感じる。白磁への胎動は北齊期にあり、この時期は三彩誕生の機運も高まり、白い胎土と透明な釉薬が必要だったことも背景として見逃せない。白いやきものへの渴望は強くとも、白磁の焼成は困難を極めたのである。

4 黒釉(褐釉)

青磁や白磁と並び、東アジアの陶磁器を装飾する三大釉薬の一つである。釉中に鉄分が8-10%加わると黒や褐色となる。さらに鉄分が加わると赤みが強く柿釉と言われるものになる。酸化炎焼成、還元炎焼成、いずれもあるようだが、強い還元炎の場合が多いようである。桃山地時代、美濃窯で生産された瀬戸黒茶碗は1250度の還元炎焼成後すぐに窯から引き出して急冷させ、徐冷による酸化を防ぐ。これを「引き出し黒」と呼び、深みのある漆黒の黒色を出すことができる。

黒釉の歴史は1-2世紀中国の後漢代の越州窯にはじまり、宋代の福建省建窯などのいわゆる天目などがよく知られている。長石の多い粘り気の強い釉薬で、高温で溶けてガスの気泡が出る。それが破裂し、その痕跡が釉面いっぱい広がる。これが油滴天目である。さらに建窯ではこの気泡が筋状に流れた兔毫盞、禾目天目などの他

に世界に三碗しかないという曜変天目、複数の褐色の釉薬をかけまわす灰被天目など多種多様な世界を見ることができる。東南アジアでは12-15世紀のクメール陶器に見るべき黒褐釉のやきものがある。

4 三彩

青磁、白磁、黒釉は、灰釉を元にした高火度焼成(1000-1300度)の「やきもの」だった。この三彩は釉薬(呈色剤)に溶媒剤(鉛など)を入れて、低火度(500-800度)で焼成する。胎土と釉薬に含まれる珪酸と呼ばれる素材が溶媒剤の鉛やソーダを入れると低火度で化合し融解する。中国では漢時代に大いにこの技法がはやり、緑や褐色のやきものが作られた。やはり、一番有名なやきものは唐三彩だろう。白色の胎土に緑、茶の釉薬がかかる。時には藍や紫が加わり四彩、五彩になり、二色の二彩もあるが、三彩の定義は複数色の釉薬をいうので、いずれも三彩と呼ばれる。

低火度釉のやきものは西アジアや南欧で大きく発展しており、エジプトやメソポタミアでは紀元前3000年ごろから石英の粉を練った胎土に二種類のソーダ釉をかけたファイアンス陶器が生まれ、地中海南岸では紀元前後に鉛釉陶器を発達させていく。このソーダ釉三彩は15世紀にはマジョリカ陶器を生み出し、西欧の主流となる。なお、唐三彩が生まれると西アジアではそれを模倣したペルシャ三彩が流行する。

日本では唐三彩を模倣した奈良三彩があり、その後、鉛釉陶器は作られず低迷が続く。桃山時代に福建省などで焼かれた華南三彩が流入し発展すると楽焼などで鉛を溶媒として、瀬戸黒と同様の手法で黒色のやきものを焼いた。楽焼の黒色の源流がカラフルな色釉にあると思うと、なんともやきものの深淵な面白さを感じずにいられない。

(学芸調査室 遠藤 啓介)



編集

発行: 令和5年7月19日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <https://kyureki.jp>